**①　＊６０分**

■以下は、２０１２年度の、慶応義塾大学文学部自己推薦入試の小論文の試験問題の一部です。今から、６０分以内に何も見ないで答案を作成してください。がんばりましょう。ただし、６０分考えてどうしても書けなかった場合、一行目に「書けませんでした」と書いてくださっても結構です。

問題

十九世紀のドイツの哲学者ニーチェは『道徳の系譜』のなかで、「これまで人類の上に蔓延（板谷注：いきわたること）していた呪詛（板谷注：困ったこと、呪われた事柄）は苦しみの無意義ということであって、苦しみそのものではなかった」（木場深定訳）と述べています。この言葉は、現代の日本においてどのような意味をもちうると考えますか、あなたの意見を述べなさい。（３２０字以上４００字以内）　　　　　　　　　＊板谷の注：いくつかの段落よりなる文章を記述すること

**１年９組　　　番　　　氏名**

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

**３２０**

**４００**

**■エキスパート活動　（②Ａ）　　　４０分**

　　　　次の文章は、慶応義塾大学文学部自己推薦入試の小論文の試験問題に引用されたニーチェの文章を、さらに前後を補って示したものです。これを読んで、各グループ内で、思ったこと、感じたこと、共感したこと、共感できないこと、など自由に意見や感想を出し合いましょう。出された意見や感想は、メモ欄に各自で記録しておきましょう。　**＊難しい文章ではありますが、分かる範囲で自由にのびのびと意見を出し合いましょう！**

人間は自己自身を弁明し、説明し、肯定するすべを知らなかった。彼は自己の意義の問題に苦しんだ。彼はそれ以外にも苦しんだ。彼は要するに一つの病気の動物であった。しかし苦しみそのものが彼の問題であったのではない。むしろ「何のために苦しむか」という問いの叫びに対する答えの欠如していたことが彼の問題であった。人間は、この最も勇敢で、最も苦しみに慣れた動物は、苦しみそのものを拒否したりはしない。彼はそれを欲する、彼はそれを求めさえもする。もしその意義が、苦しみの目的が彼に示されるとすればだ。これまで人類の上に蔓延していた呪詛は苦しみの無意味と言うことであって、苦しみそのものではなかった。　　※傍点は原文のママ　　（ニーチェ著、木場深定訳『道徳の系譜』（岩波文庫）より）

●メモ欄　　１年９組　　番　　氏名

**■エキスパート活動　（②Ｂ）　　　４０分**

　次の文章は、文部科学省検定済教科書『伝え合う言葉　中学国語３』（教育出版）に掲載されている、あさのあつこの小説「みどり色の記憶」の全文です。これを読んで「人が生きることの意味、悩み苦しむことの意義」について各グループで考え、過日の、慶応文学部のニーチェの小論文試験問題の解答を作成するのにヒントになりそうな意見、感想などを出し合い、メモ欄に各自で記録しておきましょう。

　街は夕暮れの光の中で、淡い金色に輝いていた。コンビニエンスストアの前を過ぎまっすぐに歩く。

　ふっといい匂いがした。焼きたてのパンの匂いだ。

「あら千穂ちゃん、お久しぶり。」

『ベーカリーＹＡＭＡＮＯ』のドアが開いて、白いエプロン姿の女の人が出てきた。丸い顔がにこにこ笑っている。優しげな笑顔だ。同級生の山野真奈の母親だった。笑った目もとが真奈とよく似ている。小学生の時から真奈とは仲よしで、この店でよく焼きたてのパンやクッキーをごちそうになった。千穂は特に食パンが好きだった。窯から出されたばかりのほかほかの食パンは、バターもジャムも必要ないぐらいおいしいのだ。しかし、「他人さまのおうちで、たびたびごちそうになるなんて、はしたないわよ。もう、やめなさい。欲しいなら買ってあげるから。」

　母の美千恵にそう言われてから、『ベーカリーＹＡＭＡＮＯ』に寄るのをやめた。

　美千恵はときどき、職パン屋ケーキを買ってきてくれる。有名な店のケーキをおやつに出してくれたりもする。けれど、そんなにおいしいとは思えない。どんな有名店のケーキより、真奈たちとくすくす笑ったり、おしゃべりしたりしながら、口いっぱいに頬張ったパンのほうがずっとおいしい。

　もう一度、ほかほかの食パンにかじりつきたい。

　そんなことを考えたせいだろうか、キュルキュルとおなかが音をたてる。頬がほてった。

　やだ、恥ずかしい。

　しかし、山野のおばさだんは気がつかなかったようだ。千穂の提げている布製のバッグをちらりと見やり、

「これから、塾？」

「はい。」と答えた。バッグの中には塾で使う問題集とノートが入っている。

「千穂ちゃん、偉いわねえ。真面目にお勉強して。それに比べて、うちの真奈ったら、受験なんてまだまだ先のことだって涼しい顔をしているのよ。塾にも通ってないし。ほんと、千穂ちゃんをちょっとでも見習って、しっかりしてほしいわ。」

　そんなこと、ありません。

　千穂は胸の中で、かぶりを振った。

　真奈は偉いと思います。しっかり、自分の将来を考えています。あたしなかより、ずっと……。

「千穂、これ、まだ誰にも言ってないんだけど、……あたし、お父さんみたいになりたいなって思ってるんだ。パン職人。」

　今日のお昼、一緒にお弁当を食べていた時、真奈がぼそりとつぶやいた。昼食の前、四次限めに、来年にひかえた受験に向けて志望校をどう決定していくか、どう絞っていくか、担任の先生から説明をうけたばかりだった。

「……高校受験というのは、ただの試験じゃない。きみたちの将来につながる選択をするということなんだ。具体的な職業までは無理としても、自分は将来、何がしたいのか、あるいはどんな人間になりたいのか、そういうことをじっくり考えて進路を選択してもらいたい。自分の意志が必要なんだ。自分の将来を自分自身で選択するという意志をもってもらいたい。」

　いつもはのんびりした口調の先生が、生徒一人一人の顔を見やりながら、きっぱりと言い切った。

　意志をもってもらいたい。

　その一言を千穂が心の中で反芻していた時、「パン職人」という言葉が耳に届いたのだった。

「なんかさ、うちのお父さん、普通のおじさんなんだけど、パンを作っている時だけは、どうしてだかかっこよく見えるんだよね。作ったパンもおいしいしさ。お客さん、すごくうれしそうな顔して買いに来てくれるんだよね。なんか、そういうの見てるといいかなって、すごくいいなって。もちろん、大変なのもわかっている。朝なんてめちゃくちゃ早いしさ、うちみたいに全部手作りだと、ほんと忙しいもの。嫌だなあって思ってた時もあったんだけど……実はね、千穂。」

「うん。」

「この前、お父さんと一緒にパン、作ってみたの。」

「へぇ、真奈が？」

「うん。もちろん、売り物じゃなくて自分のおやつ用なんだけど。すごく楽しくて……あたし、パン作るの好きなんだって……思ってんだ。」

　少してれているのか、頬を赤くして真奈がしゃべる。そこには確かな自分の意志があった。

真奈って、すごい。

　心底から感心してしまう。すごいよ、真奈。

　真奈が顔をのぞきこんでくる。

「千穂は画家志望だよね。だったら、やっぱり芸術系の高校に行くの？」

「え……あ、それはわかんない。」

「だって、千穂、昔から言ってたじゃない。絵描きさんになりたいって。あれ、本気だったでしょ？」

「……まあ。でも、それは……。」

　夢だから。口の中でつぶやき、目を伏せる。うつむいて、そっと唇を噛んだ。

　山野のおばさんに頭を下げて、また、歩きだす。さっきより少し足早になっていた。

　花屋、喫茶店、スーパーマーケット、ファストフード店、写真館……見慣れた町の風景が千穂の傍らを過ぎていく。

　足が止まった。

　香りがした。とてもいい香りだ。焼きたてのパンとはまた違った芳しい匂い。

　立ち止まったまま視線を辺りにめぐらせた。写真館と小さなレストランの間に細い道がのびている。アスファルトで固められていない土の道は緩やかな傾斜の上り坂になっていた。この坂の上には小さな公園があり。そして、そこには……。

　大きな樹。

　枝を四方に伸ばし、緑の葉を茂らせた大きな樹がある。小学校の三、四年生まで真奈たちとよく公園に遊びに行った。みんな、大樹がお気に入りで、競って登ったものだ。

　あれは、今と同じ夏の初めだった。幹のまん中あたりまで登っていた千穂は足を踏み外し、枝から落ちたことがある。かなりの高さだったけれど奇跡的に無傷ですんだ。しかし、その後、大樹の周りには高い策が作られ簡単に近づくことができなくなった。木登りができなくなると、公園はにわかに退屈なつまらない場所となり、しだいに足が遠のいてしまった。中学生になってからは公園のことも、大樹のことも思い出すことなどほとんどなかった。

　それなのに、今、よみがえる。

　大きな樹。卵形の葉は、風が吹くとサワサワと優しい音を奏でる。息を吸い込むと、緑の香りが胸いっぱいに満ちてくる。

　千穂は足の向きを変え、細い道を上る。どうしても、あの樹が見たくなったのだ。塾の時間が迫っていたけれど、我慢できなかった。ふいに鼻腔をくすぐった緑の香りが自分を誘っているように感じる。大樹が呼んでいるような気がする。

　だけど、まだ、あるだろうか。とっくに切られちゃったかもしれない。切られてしまって、何もないかもしれない。

　心が揺れる。どきどきする。

「あっ！」

　叫んでいた。大樹はあった。四方に枝を伸ばし、緑の葉を茂らせて立っていた。昔と同じだった。何も変わっていない。周りに設けられた囲いはぼろぼろになって、地面に倒れている。だけど、大樹はそのままだ。

　千穂はカバンを放り出し、スニーカーを脱ぐと、太い幹に手をかけた。あちこちに小さな洞やコブがある。登るのは簡単だった。

　まん中あたり、千穂の腕ぐらいの太さの枝がにゅっと伸びている。足を滑らせた枝だろうか。よくわからない。枝に腰をかけると、眼下に町が見渡せた。金色の風景だ。光で織った薄い布を街全部にふわりとかぶせたような金色の風景。そして、緑の香り。

　そうだ、そうだ、こんな風景を眺めるたびに、胸がドキドキした。この香りを嗅ぐたびに幸せな気持ちになった。そして思ったのだ。　　　　　**※裏面に続く。**

　あたし絵を描く人になりたい。

　理屈じゃなかった。描きたいという気持ちが突き上げてきて、千穂の胸を強く叩いたのだ。そして今も思った。

　描きたいなあ。

　今、見ている美しい風景をカンバスにうつしとりたい。

　画家なんて大仰なものでなくてもいい。絵を描くことに関わる仕事がしたかった。芸術科のある高校に行きたい。けれど母の美千恵には言い出せなかった。母からは、開業医の父の跡を継ぐために、医系コースのある進学校を受験するように言われていた。祖父も曽祖父も医者だったから、一人娘の千穂が医者を目指すのは当然だと考えているのだ。芸術科なんてとんでもない話だろう。

　絵描きになりたい？千穂、あなた、何を考えてるの。絵を描くのなら趣味程度にしときなさい。夢みたいなこと言わないの。

　そう、一笑に付されるにちがいない。大きく、ため息をつく。

　お母さんはあたしの気持ちなんかわからない。わかろうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。

　ざわざわと葉が揺れた。

　そうかな。

　かすかな声が聞こえた。聞こえたような気がした。耳を澄ます。

　そうかな、そうかな、本当にそうかな。

　そうよ。お母さんは、あたしのことなんかこれっぽっちも考えてくれなくて、命令ばかりするの。

　そうかな、そうかな、よく思い出してごらん。

　緑の香りが強くなる。頭の中に記憶がきらめく。

　千穂が枝から落ちたと聞いて美千恵は、血相をかえてとんできた。そして、泣きながら千穂を抱きしめた。

「千穂、千穂、無事だったのね。よかった、よあった、行きていてよかった。」

　美千恵はぼろぼろと涙をこぼし、「よかったよかった。」と何度も繰り返した。

「だいじな、だいじな私の千恵。」そうも言った。母の胸に抱かれて、その温かさを感じながら、千穂も「ごめんなさい。」を繰り返した。ごめんなさい、お母さん、ありがとう、お母さん。

　思い出したかい？

　うん、思い出した。

　そうだった。この樹の下で、あたしはお母さんに抱きしめられたんだ。しっかりと抱きしめられた。

　緑の香りを吸い込む。

　これから家に帰り、ちゃんと話そう。あたしはどう生きたいのか、お母さんに伝えよう。ちゃんと伝えられる自信がなくて、ぶつかるのが怖くて、お母さんのせいにして逃げていた。そんなこと、もうやめよう。お母さんに、あたしの夢を聞いてもらうんだ。あたしの意志であたしの未来を決めるんだ。

　大樹の幹をそっとなでる。

　ありがとう。思い出させてくれてありがとう。

　樹はもう何も言わなかった。

　風が吹き、緑の香りがひときわ、濃くなった。千穂はもう一度、深くその香りを吸い込んでみた。

●メモ欄　　　　１年９組　　番　　氏名

**■エキスパート活動（②Ｃ）　　　４０分**

次の文章は、『平家物語』の有名な「忠度都落」の場面です。平家の武将、平忠度は、源氏に追われ平家一門とともに都落ちをしようとしますが、中途にて思い返し、和歌の師であり、後に『千載和歌集』を編纂した藤原俊成のいる都へと戻ります。

この文章を読んで「人が生きることの意味、悩み苦しむことの意義」について各グループで考え、過日の、慶応文学部のニーチェの小論文試験問題の解答を作成するのにヒントになりそうな意見、感想などを出し合い、メモ欄に各自で記録しておきましょう。

＊本文は高等学校国語用文部科学省検定済教科書『精選古典Ｂ古文編』（東京書籍）による。

は、いづくよりや帰られたりけん、侍五騎、童一人、わが身ともに七騎取つて返し、五条三位俊成卿の宿所におはして見給へば、門戸を閉ぢて開かず。「忠度。」と名のり給へば、「落人帰り来たり。」とて、その内騒ぎ合へり。薩摩守馬より降り、自ら高らかにのたまひけるは、「別の子細候はず。三位殿に申すべきことあつて、忠度が帰り参つて候ふ。門を開かれずとも、この際まで立ち寄らせ給へ。」とのたまへば、俊成卿、「さることあるらん。その人ならば苦しかるまじ。入れ申せ。」とて、門をあけて対面あり。事の体何となうあはれなり。  
　薩摩守のたまひけるは、「年ごろ申し承つて後、おろかならぬ御事に思ひ参らせ候へども、この二、三年は京都の騒ぎ、国々の乱れ、しかしながら当家の身の上のことに候ふ間、疎略を存ぜずといへども、常に参り寄ることも候はず。君すでに都を出でさせ給ひぬ。一門の運命はや尽き候ひぬ。撰集のあるべきよし承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうど存じて候ひしに、やがて世の乱れ出できて、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の嘆きと存じ候ふ。世静まり候ひなば、勅撰の御沙汰候はんずらん。これに候ふ巻物のうちにさりぬべきもの候はば、一首なりとも御恩をかうぶつて、草の陰にてもうれしと存じ候はば、遠き御守りでこそ候はんずれ。」とて、日ごろ詠み置かれたる歌どもの中に、秀歌とおぼしきを百余首、書き集められたる巻物を、今はとうつ立たれける時、これを取つて持たれたりしが、鎧の引き合はせより取り出でて、俊成卿に奉る。三位、これを開けて見て、「かかる忘れ形見を賜りおき候ひぬるうへは、ゆめゆめ疎略を存ずまじう候ふ。御疑ひあるべからず。さてもただ今の御渡りこそ、情けもすぐれて深う、あはれもことに思ひ知られて、感涙おさへ難う候へ。」とのたまへば、薩摩守喜んで、「今は西海の波の底に沈まば沈め、山野に屍をさらさばさらせ。憂き世に思ひ置くこと候はず。さらばいとま申して。」とて、馬にうち乗り、甲の緒を締め、西を指いてぞ歩ませ給ふ。三位後ろを遥かに見送つて立たれたれば、忠度の声とおぼしくて、「前途程遠し、思ひを雁山の夕べの雲に馳す」と、高らかに口ずさみ給へば、俊成卿いとど名残り惜しうおぼえて、涙をおさへてぞ入り給ふ。　  
　その後、世静まつて、千載集を撰ぜられけるに、忠度のありしありさま、言ひおきし言の葉、今更思ひ出でてあはれなりければ、かの巻物のうちに、さりぬべき歌いくらもありけれども、勅勘の人なれば、名字をば表されず、「故郷の花」といふ題にて詠まれたりける歌一首ぞ、「よみ人知らず」と入れられける。

　　さざ波や　志賀の都は　荒れにしを　昔ながらの　山桜かな

　その身朝敵となりにしうへは、子細に及ばずといひながら、恨めしかりしことどもなり。

--------------------------------------------------------

■現代語訳（主に、小学館『日本古典文学全集』による）

　薩摩守忠度は、どこから帰られたのであろうか、侍五騎・童一人を連れ、自分とともに七騎でもって引き返し、五条の三位俊成卿の家にいらっしゃって御覧になると、門の扉を閉めて開かない。「忠度」名乗られると、「落人が帰って来た」といって家の内部で人々が騒いだ。薩摩守は馬から降り、自分自身で大声で言われるには、「特別の理由がる訳ではありません。三位殿（俊成）に申したい事があって、忠度が帰って参っております。門をお開きにならないにしても、この近くまでお寄りください」と言われると、俊成卿は、「来られるだけの事情がおありになるのだろう。その人ならば差し支えあるまい。門をあけてお入れしろ」といって、門をあけてお会いになる。様子は何となく哀れである。  
　薩摩守が言われた事には、「ここ何年もの間、歌の事についてご指導願い、お教えいただいて後、粗略にお思いすることはありませんでしたが、この二、三年は京都の騒ぎ、各地での反乱、すべて当平家の身の上の事でございますので、歌道をなおざりに考えていたのではありませんけれども、変わらずにお伺いすることもできませんでした。わが君（安徳天皇）はすでに都をお出になりました。一門の運命はもう尽きてしまいました。勅撰集の撰集があるだろうという事を承りましたので、生涯の名誉に一首でもご恩をこうむり、（勅撰集に）入れていただこうと考えておりましたのに、すぐに乱が起こって、その沙汰もなく中止になったことは、わたしにとって全く大きな嘆きと考えております。世が治まりましたならば、勅撰のご沙汰（歌集を選べというご命令）がございましょう。ここにあります巻物の中に適当な物がありますならば、一首でもご恩をこうむり、（撰集に）入れていただいて、草葉の陰でもうれしいと思いますことがありますならば、遠いあの世から末長くあなたをお守りしたいと思います」といって、長い間に詠んでおかれた多くの歌から、秀歌と思われるのを百余首書き集められた巻物を、いざ出発という時に、これを取って持たれたが、それを鎧の合い目から取り出して、忠度が俊成卿に差し上げた。三位（俊成）は、これをあけて見て、「このような忘れ形見をいただきましたうえは、けっしいい加減には思いますまい。お疑いなさいますな。それにしてもこのお越しは、風情も非常に深く、しみじじとした思いも特にすぐれて感ぜられて、感涙をおさえきれません」と言われると、薩摩守は喜んで、「今は西海の波の底に沈むのなら沈んでもよい、山野に屍をさらすならさらしてもよい、この世に何の未練もありません。それではお別れを申します」といって、馬にうち乗り、甲の緒を締め、西に向かって馬を進められた。三位（俊成）は、後ろ姿を遠くまで見送って立っておられると、忠度の声と思われて、「前途程遠し、思いを雁山の夕べの雲に馳す（別れの情を述べた『和漢朗詠集』の一節）」と声高らかに口ずさまれたので、俊成卿はますます名残惜しく思われて、涙をおさえて邸内に入られる。　  
　その後、世の中が治まって『千載集』を俊成が撰ばれたが、忠度のあの時のありさま、言い残した言葉を、今あらためて思い出して感慨が深かったので、あの巻物の中に、入集にふさわしい立派な歌はたくさんあったけれども、忠度は勅勘の人（後白河法皇から反逆の咎で勘当になった平家の人）なので、名字を公にされず、「故郷の花」という題で詠まれた歌一首だけを、俊成は「読人知らず」としてお入れになった｡  
　　さざなみや…（天智天皇のかつての）志賀の旧都は荒れてしまったが、桜の名所、長等山の山桜は昔からそのままだなあ（このように人事は移り変わっていくが、美しい自然は変わらないことよ）  
　忠度は、その身が朝敵（国の罪人）となってしまったからには、とやかく言えないが、悲しい残念なことであった。　　　　　　　　　　　　　　　　　＊この後、忠度は源平の合戦で戦死したのであった。

●メモ欄　　１年９組　　番　　氏名

＊メモ欄が足りない場合裏面を利用してください。

■**③ジグソー活動　　　４５分**

　前のグループでの話し合いの内容を踏まえ、それらを十分に活用し、意見を出し合って、各グループで改めて以下の問題に答えましょう。答案は、グループで一つ作成しても、一人ひとりで作成しても、どのようなかたちでも結構です。

問題

十九世紀のドイツの哲学者ニーチェは『道徳の系譜』のなかで、「これまで人類の上に蔓延していた呪詛は苦しみの無意義ということであって、苦しみそのものではなかった」（木場深定訳）と述べています。この言葉は、現代の日本においてどのような意味をもちうると考えますか、あなたの意見を述べなさい。

（３２０字以上４００字以内）　　　　＊慶應義塾大学２０１２年度自己推薦入試、小論文問題より。

（注：いくつかの段落よりなる文章を記述すること）

１年９組　　番　　氏名

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

**３２０**

**４００**

■**④クロストーク**

この後、各グループで代表作をひとつずつ発表してもらいます。発表者、発表する解答を決めましょう。

各グループの発表を聞いて、思ったこと、考えたことを自由にメモしましょう。

　　　　　　　　　　　　　　　　　１年９組　　番　　氏名

**⑤**

■前回の授業での体験を踏まえ、改めて、もう一度以下の問題に各自で取り組んでみましょう。もちろん、ほかの人たちの意見、アイディア等を踏まえてくださって結構です。

問題

十九世紀のドイツの哲学者ニーチェは『道徳の系譜』のなかで、「これまで人類の上に蔓延していた呪詛は苦しみの無意義ということであって、苦しみそのものではなかった」（木場深定訳）と述べています。この言葉は、現代の日本においてどのような意味をもちうると考えますか、あなたの意見を述べなさい。（３２０字以上４００字以内）　　　　　　　　　＊板谷注：いくつかの段落よりなる文章を記述すること

**１年９組　　番　　氏名**

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

**３２０**

**４００**